

狐狸狐狸ばなし

十一場

北條秀司

森繁久弥とはずいぶん仕事をして来たように思うのだが、記録表を見ると書き下ろしは案外少なく「狐狸狐狸ばなし」と「ドクトル机竜之助」と二つ切りだ。あとは既存作品で「夜な夜な中納言」「深川不動」と、これもたった二つだ。しかしどれも皆おもしろかった。印象が強烈だから数多く取り組んだ気がするのかもしれない。テレビでは「王将」「芦刈」「姥子の湯」「閣下」などを演っている。映画は「山鳩」を撮った。一トむかし前軽井沢から浅間の裾野をゴロゴロはしっていた草軽電車の駅長が主人公で、新国劇の辰巳に書いて成功したもののだが、森繁も岡田茉莉子を相手に牧歌的な味を見せて成功した。わたしが仮りにつけたカラマツ沢という駅名がいまもバス停の名で残っている。しかし、お互いに気がつかなかった繋がりがずっと昔にあったのがおもしろい。満洲移民を題材にした「東宮大佐」という芝居が、終戦前新京公会堂で新京放送劇団によって公演された時、芦田伸介とともに主役を演じているのだ。古い舞台写真を見て気がついた。

その一

江戸の末期。

大阪の町外れ、梅田の田圃中にある伊之助の住居。

一軒家で隣りは墓地。

家業はささやかな手拭職。

女房のおきわと雇人又市の三人暮らし。

初冬の白く曇った昼下がりに。

おきわ、怠け者らしい風態で昼間から茶碗酒をのんでいる。

又市は染め場の方で染め薬を煮たり、裏手の手拭干し場の方へ行ったり、のろのろと動いている。

近所の女房おまさ、おりく、おげんが怒気を含んだ顔でおきわの前に立っている。

おまさ どうないしてもいやや言うのんか。

おきわ いややと言うたらいややねん。(のむ)

おりく 今日はお初天神さんの垣直しや。皆んな仕事を休んで出て来てるのや。

おげん 昼日中からお酒のんでる閑があったら、出て来たら

ええやないか。

おきわ 閑でのんでるのやないねン。お菓でのんでるねン。
おまさ ええお菓やな。そんなお菓やつたらわてものみたい
わ。

おきわ ほしかったらのため。(空になった茶碗を放り、銚子
を持つ) さあ、ついだろ。……のまんのか。

近所の女房おいねが来る。

おいね なに喋ってるのや。皆が手エあけて待つてるやない
か。

おまさ おきわはんがお尻^{しと}上げへんのや。

おいね 垣直し手伝わんと言うのか。

おきわ そんなもんはお宮ですることちゃ。手伝うと癖にな
るわ。

おいね ふうン、えらいもんやなア。さすがは間男のおきわ
はんや。

おきわ なんやてツ。いつわてが間男した。言うからには証
拠があるのやろ。さあ言うてみイ。証拠もなしにそん
なこと言やがったら承知せんよつてに。(仕事用の鍬
を掴む)

女房達 (尻込みする)

おまさ 行こ。こんな女子相手にしてたら日が暮れる。

おりく なんじゃい、牢名主みたいな顔さらして。
おげん 間男に浮気されてるのンも知らんと。
おきわ なんやて。(思わずキツとなる)

女房達、どっとわらって駈け去る。

おきわ 間男に浮気されてる……。 (心にひびくものがある)
……それでこの頃顔見せへんのやな。……又市。

又市 へえ。

おきわ 空心堂へ行って、法印さん呼んで来て。急用が出来ました言うて。

又市 へえ。

おきわ いや、待ち。わてが行く。(袷纏をひっかける)
又市 (外を見て) 法印さん来はった。

江戸からの流れ者である空心堂の庵主重善が、鶏を
ブラ下げて、垣の外を通りかかる。

おきわ ちょうどよかった。……庵主さん、ちょっとお入り
なはっとくりやす。

又市 ええ鶏だんなア。

重善 道端に倒れていたの、葬ってやろうと思って。

又市 お腹なかへ葬りなはんのやろ。

おきわ 阿呆。法印さんになんちゆう口を利くのや。あつちやへ行き。……あ、そや、今の内に問屋へ行つといで。

又市 へえ。(奥へ入る)

重善 変わったのがやって来たな。

おきわ 前の職人に逃げられたんで、仕様ことなしに置いてますのやけど、……ちよつと此処のところが……。 (頭を指す)

又市 (風呂敷包みを持って出る) 行て参じます。

又市、出て行く。

重善 何か用か。

おきわ (急に態度を変える) 淫乱坊主ッ。昨日も一昨日もお堂を空けて、いったい何処イ行てたんや。

重善 (これも態度を変えて) 何処へ行こうと勝手だ。

おきわ あんた、また女子が出てんとな。

重善 (黙殺して) 今日は忙しいんだ。ゆっくりした日に聞いてやろう。

おきわ 待ちッ。なにがいったい忙しいのや。

重善 檀家が来て居るのだよ。

おきわ ふん、白粉臭い檀家やろ。

重善 白粉臭うても肥料臭うても、檀家が無うてはやっていけねえ。

おきわ 博奕のテラでは足らんのか。

重善 ま、なんでもいい。またゆつくりとした日に。

おきわ 待ち言うたら。なんでそないにソワソワせんならん
のや。……坐り。(縁に坐らせる)

重善 (茶碗を見て) ……いい物がある。

おきわ やれへん。わてがのむのや。(葉罐から銚子を上げ

ようとして) あつツ。

重善 はは。いい気味だ。

おきわ なあ、……今度の女子というのは、どんな女子や。

重善 そんなものは居ねえよ。

おきわ ふん、とぼけやがつて。ちゃんと顔に描いたアる。

……どんな女子や。……素人か。……玄人か。

重善 そんなものは居ねえと言つたら。

おきわ 隠さいでもええ。……嫉かへんさかい言うてみ。…

…なあ、言うてみ。

重善 大した女じゃねえんだよ。

おきわ それみ。やっぱりあるんやないか。嘘つき。

重善 向こうだけが熱を上げてるんだ。

おきわ そんなら手エ出さなええやないか。……出したんや
ろ。

重善 ……まア、浮世の義理でな。

おきわ (嫉妬が込み上げる) いやな奴ツ。……い、いった

い何処の女子や。……後家はんか。……^{てかけ}妾か。

重善 身分だけは凄くいいんだが……。

おきわ 金持のなんぞか。

重善 うん、一人娘なんだ。

おきわ 金持の一人娘。金持の一人娘が、あんたみたいな坊ぼんさんに。

重善 おおきなお世話だ。養子に来て下され、一生大事に
仕えますとまで言ってるんだ。

おきわ (ギラギラと嫉妬を光らせて) ふん、行ってやった
らええやないか、そないええ口やったら。

重善 お前がすすめるなら、行くと決めるかな。(ゆっく
りと腰を上げる)

おきわ 待ち。……名、名前だけ言うてみ。何処の金持や。

重善 長良の桑島という物持の娘だ。

おきわ あつ、あの牛娘か。からだ中をペロペロとねずりよ
るちゅう。

重善 おめえ、よく知ってるな。

おきわ あ、あの娘に、……あの娘にそのからだを。……い
やらしッ。ああ、いやらしッ。臭いがうつる。あっち
やへ行て。(突き放す)

重善 そんなに評判なのか、あの娘。

おきわ あんたは渡り者ンやさかい知らんのや。来る養子来
る養子、みんな逃げて帰るのや。

重善 道理で情が深かすぎると思った。(微笑) そうだっ

たのか。

おきわ ちよつと裸になり。頭から井戸水かけたるよつて。

重善 よしてくれ。

おきわ いや、そないせんと臭いがとれへん。脱ぎッ。

重善 いやだよ。

おきわ そんならええ。その代り、わてはもう附合わへんさ
かい。

重善 ちようどいい。

おきわ なんやて。

重善 どうだ。おきわ。……もう一度元の他人に戻らねえ
か。

おきわ あんた、それ、正気で言うてるのンか。

重善 当分そうした方が、いいンじゃねえかと……。

おきわ 恐おなつたんやな。

重善 (無言)

おきわ それとも、わてがハナについたんか。

重善 (無言)

おきわ わてはな、どないなことがあつても、あんたから離
れへんさかい、そのつもりで居てや。

重善 (無言)

おきわ わてはいつ死んでもええ覚悟を決めてるのや。間男
はきついお仕置と昔から決まってるのやさかい。

重善 だから言ってるンだよ。もしかおめえの亭主がカン

づいて訴えでもしたら、それッ切りだからな。

おきわ うちの蛇は、もうカンづいとるで。

重善 ほんとか。

おきわ ビクビクせえでもええ。あいつはとても訴えたりよ
うせえへん。

重善 そうでもあるめえ。蛇は執念深けえって言うからな。

おきわ あいつはわての身体がほしいのや。殺してしもたら
それまでや。ほほ。

重善 ま、なににしても、当分は慎んだ方がいい。檀家の
眼もあるからな。

おきわ 法印さん、あんた、牛娘の養子になりたいのやな。

重善 なりたかアねえけど、まとまった金を掴むためには、
ちよつとの間我慢して見ようかと……。

おきわ わかった。あんたは道楽者ンやさかい、きつと牛娘
がお気に召したんやろ。

重善 そんなことは……

おきわ いや、そうや。きつとそうや。

重善 そうじゃねえと言ったら。……おめえを連れて江戸
に帰る路用を稼ぎてえからよ。

おきわ ふうん、うまいことを言うて。……此の女蕩し。

(のみ、重善にもませる) ともかくあの牛娘とは切
れとくれ。……あの娘がその身体をペロペロとねずり
よるのンかんがえると、からだ中がカアツとなつて来

るわ。あいつだけやない。ほかのどんな女子にも、そのからだは触らさへんのや。

重善 へ。御自分じゃ御亭主に毎日触らせているくせに。

……相当油ツこいって言う話だぜ。

おきわ あいつはそれだけがたのしみで生きてるんや。そや

さかい、女房の間男を知っても、よう荒立てへんのや。

重善 へ。えらそうな口をききやがつて。……相当お熱を

上げた時があつたと言うじゃねえか。

おきわ それはあいつが役者をしとつた時のことや。……けど、一緒になつて見て、えらいことをしてしもたと思もたんや。煮焚き物から洗濯まで、せつせとやつて呉れるかわりに、お寝間のひつこいこと。まるで執念の蛇や。……きつと、蛇遣いの一座に居た間に、巳みいさんに憑かれてしまひよつたんや。……つくづくいやになつてしもた。けど、あんたのことをおさえられてる弱身で、辛抱してるのや。その苦労も知らんと、あんな牛娘と浮気したりして。……もしわてを棄てて逃げるような真似したら、どんなことするかわからんさかい、その覚悟でいてや。

重善 ああ、とんだ女とかかわり合つちまつたよ。

おきわ ほほ。……蛇は得意廻りで夕方まで帰れへん。……

久し振りに二階でゆつくり、口直しをしよう。……さあ。

重善 今日は止そうよ。

おきわ いや、帰さへん。……さあ、早う。(煽情的に二階へ誘う)

重善 困った女だ。(誘いに応じる)

その二

その日の夜。

空心の庵室。

壁にも本尊にも雨漏りの跡が眼立つ。

博奕打ち仲間が大声で喧嘩をはじめている。

福造が木魚を叩いて皆を鎮まらせる。

福造 まあまあ、そない大声を立てんと、ジツクリ話を附

けたらどうや。わいが仲裁役に一升買うたるさかい、

一杯のんで来い。(錢をやる)

男一 すまんな。(皆をおさめる)

男二 福やん、此の頃えらい景気がええねんな。

男三 牛娘はんの一件でか。

福造 阿呆。そんなこと言うなら、返せ。

男四 嘘や嘘や。

男五 福やん、行けヘンのんか。
福造 あとから行く。先にやっつて呉れ。

男達、ガヤガヤ喋りながら外へ出てゆく。
重善が一升徳利を提げて、次の間から現われる。

福造 何処へ行ってたんや。

重善 ガヤガヤとうるせえから、あつちの部屋で飲んで居た。(酔っている)

二人、炬べりに坐る。
梟の声。

福造 婿入りは何日にする。それだけ決めといて呉れ。

重善 ……もう少し話をのばして貰えねえか。

福造 おいおい、いまとなつてそんなことを言い出されたら、仲へ入ったわいの顔にかかわるがな。

重善 懐ろにかかわるんだらう。

福造 はは。……割つた話がそういうことや。……な、わいをたすけると思つても、早いところ行つて呉れ。

重善 困つたなア。

福造 いやになつたらとつと逃げ出せばええんや。わいは礼金さえ握つたら、それでええのやさかい。

重善 (のむ)

福造 娘の方でも、よっぽど気に入ったかして、もしあの
人に棄てられたら、淀川に身を投げるちゆうて、親を
困らしてるそうや。功德やと思もて行たつて呉れ。

重善 そうだなア。(徳利を手にする。軽いので振る) …
…おうい、爺さん。…爺さんはいねえか。

寺男のせむしの甚平が来る。

甚平 お呼びでしたか。

重善 もう一度酒屋へ行つて来い。(徳利を投げ出す)

甚平 お酒なら、いまお客さんが持つて来はりました。

重善 お客さん。…誰だ。

甚平 へへ。(去る)

重善 へんな奴だ。

長良村の物持ちの娘おそめが、祝い樽を庖えて、入
つて来る。

おそめ 今晩は。

福造 (びっくりする) あ、とうさんやおまへんか。

おそめ なんや、お前も来てたんか。

重善 どうしたんで、今時分。

おそめ 会いとうて、会いとうて、どないもこないもならん

さかい、黙って家を出て来ましたのや。

福造 そんなことしはって、お家で心配してはりまっせ。

おそめ そや、お前家イ行て、そない言うといで。今晚、旦

那さんを連れて去ぬさかい、御ッ馳走おの用意をしとい
てて。

重善 いや、今夜はちよつと都合がわるいんで。

おそめ いやあん。今夜来ないや。来て呉れへんのやったら、

此処イ泊まって行く。

重善 そいつは困るよ。

おそめ そんならおこしやす。(手をとる)……なあ、よろ

しいやろう。

福造 へへ。

おそめ なにしてるのや。早よ行きんか。

福造 へっ。

福造、わらい顔で去る。

おそめ さあ、おのみやす。……そや、うちのましたげよ。

(口うつしにのませ、ついでに頬っぺたをペロツと嘗

める)

重善 うむッ。(頬を拭く)

おそめ なあ、あんた、うちほんまに辛いわア。一日会わへ

んと、百日くらい会わんような気がするのン。……ほんまに、死んだほうがましやわ。……さあ、もう一口。(また酒をふくむ)

重善 いいよ、自分でのむから。

おそめ うゝん。(口を持ってゆく)

重善 のむから。嘗めるのはかんべんして……。あッ。

(酔っているので、たわいなく倒される)

おそめ (馬乗りになってのませる) ……おいしかった？

重善 ああ。(うなづく)

おそめ 法印さん、……あんた、昨夜言いはったこと、ほんま？

重善 重いから、ちょっと……。

おそめ (退かず) なあ、うちが死ぬほど好きになった言いはったやろ。あれ、ほんま？

重善 ほんま。ほんま。

おそめ うれしいッ。(かじりつき、ペロペロと嘗める)

重善 うむ。(顔をしかめる)

ガラリと障子が開く。

おきわが庖丁を握って立っている。

おきわ 淫乱坊主ッ。

おそめ (愕いて、はなれる)

重善 (急いで起き直る)

おきわ さつき約束したばかりやのに。……もうこんなこととして。(憤怒の眼でおそめを睨む)……あんたが桑島はんのとうちゃんか。……此の法印さんは、わてとは深アい縁続きになる人や。勝手におびき出しに来たりすると承知せんで。二度とやって来たら、殺したるぞ。(庖丁を振り上げる)

おそめ お母ちゃんッ。(声を上げて逃げ去る)

おきわ こつて牛め。(庖丁を投げる)

甚平、とび出し、おそめの跡を追う。

おきわ ほんまに、油断も隙もない奴ツちや。(坐る)法印

さん、こうなったらわても凝つとしてられへん。わてをあんたの嫁はんにして。ハッキリと夫婦になつて。

重善 どうしたんだよ。気違えみてえな眼をして。

おきわ 気違いや。気が違うてるのや。もう今夜から、あんたのねきにへばりついて動かんことにするのや。

重善 大きな口を利きやがって。ほんとにおれの女房になりてえなら、キツパリと蛇とわかれて来い。なんだ、両天秤かけてやがって。(のむ)

おきわ (口惜し涙を泛かべて) そら、あんまりな言い方や。わてはどないぞして別れよ思うのやけど、あの蛇がど

ないしてもわてに巻きついて、はなれよれへんのや。

重 善 それっていうのが、おめえの方にも内心わるくね

え気持があるからよ。

おきわ なんやて。わてがああ蛇を好きやて。うだつきもた

いがいにしとくれ。だ、誰があんな女子の腐ったよう

な奴に。

重 善 ほんとにそうなら、蛇をブチ殺して来い。そしたら

夫婦になつてやらあ。

おきわ (うわずった声で) ほんまやな。嘘やないな。

重 善 (酔眼朦朧として) ほんとだよ。嘘じゃねえよ。

おきわ よっしゃ。ほんなら、ほんまに殺すで。ええな。

重 善 いいとも。お手際拝見と行きてえもんだ。へへ。

おきわ よう言うた。み、見てけつかれッ。(とび出してゆ

く)

重 善 はは。……大きな口を利いて行きやがった。……男

一匹殺すのは、蠅を殺すのとはわけが違わあ。へへ。

(のむ) ……だけどおれは、どうしてこう、女に惚れ

られるンだろなア。へッへッへ。(ごろりとよこに

なる)

その三

そのあくる日。

伊之助の住居。

雪催いの午後。

伊之助が井戸端で女房のものを洗濯している。

洗い終わった湯巻を竿に干す。

以前は小芝居の女形をしていたので、立居振舞が万

事しとやかである。

おきわが風呂から帰って来る。

伊之助 お帰りやす。早やかだったな。

おきわ (むつつりと座敷に上がり、鏡台に向かう)

伊之助 御飯も出けてるで。今日は寒いよって、河豚鍋にした。

おきわ 大丈夫か。よんべも曾根崎で河豚死にがあったそうや。

伊之助 そらきつと毒抜きがわるかったんや。こう見えても、

河豚にかけてはいつも座頭ざがしらはんから褒められとった腕

前や。……こればかりは他人手ひとでにはまかされん。あ

んたに万一のことでもあったら、取返しがつかんさかいなア。

伊之助、物やさしく喋りながら、いそいそと鍋をととのえる。

おきわ お酒あるのンか。

伊之助 おまつせ。ちゃあんと買うて来ておます。

おきわ 法印さんも河豚が大好きや。呼んで来たげたらどうや。

伊之助 坊さんに河豚はどうやろな。

おきわ あこの宗旨はなに食べてもええのや。わてが呼んで来う。(立つ)

伊之助 まア待って。法印さんもやけど、折角あんに食べさせよ思もて買うて来たんやよつて、今夜は水入らずでゆっくり食べような。(哀願するように言う)

おきわ (むつつりと坐る)

伊之助 (爛をする)

又市が帰って来る。

又市 唯今。

伊之助 言うた葉あったか。

又市 おました。これでよろしいか。(染め薬の袋を出す)
伊之助 (ちよつと調べて) ええ染め薬や。これやないとえ

え手拭は染め上がらん。

又市 (台所へ持つて入ろうとする)

伊之助 あ、そっちゃはいかん。胡椒と間違うておかずへで
もかけたら、一ぺんに死んでしまう。恐わい薬やさか
い、仕事場に置いとぎ。

又市 へえ。(柵に置く)

伊之助 おまいの御飯は出けてないさかい、天神裏へ行て、
うどん食べといで。(小錢をやる)

又市 へえ。

風花がチラつき出す。

伊之助 冷えると思もたら、風花がチラついて来よつた。こ
んな日は河豚に限るな。

又市 おいしそうだな。

伊之助 おいしいで。(汁を嘗めて見る) ええお加減や。

又市 お汁、残りまへんか。

伊之助 残らんな。早ようどん食べといで。

又市 へえ。……うどんか。

伊之助 不足らしい言いな。いつちよろこぶ癖に。

又市 けど、河豚の匂い嗅ぎがいたら……。

伊之助 早よあっちゃへ行き。味吸われてしまうわ。

又市、河豚に心に残して裏へ行く。

伊之助 さあ、そろそろ出けたで。……箸つけて。

おきわ (鍋の方へ来る) お酒は。

伊之助 もうええやろ。(銚子を上げる) ……ちよつとのんでみて。(注ぐ)

おきわ (のむ)

伊之助 ええか。

おきわ (うなづく)

伊之助 そんならもう一つ。(注ぐ) あても一杯お相伴しよ。(盃を持つ)

おきわ (気がつかない顔で、自分だけのむ)

伊之助 (自分でつぐ)

木魚の音。

風花がこぼれている。

伊之助 さあ、そろそろええで。お上がり。……とったげよか。(腕にとってやる) ……へ、どうぞ。おいしいで。

(自分の腕にもとる) いまにからだ中がほこほことして来よる。……精がつくで。……どうや、精のついた

こで、久し振りに昼寝せえへんか。

おきわ (むつつりとのおんではいる)

伊之助 こんな日は誰もやって来えへん。又市は何処ぞ遠い
とこへ使いにやって、内部うちから戸閉めて。……湯上が

りのその身体を、ぎゅうと抱かしてえな。

おきわ どスケベ。そんな魂胆のある河豚やったらもう食べ
へん。(箸を投げて立つ) 法印さんとこへ行て来う。

伊之助 かんになかんにん。あてがわるかつた。もう言わへ
んさかい、機嫌直して。……さあ、坐り。(坐らせ、
箸をあつめる) へ、お箸。……さあ、食べて。

おきわ いやらしいこと言わへんなら食べたる。

伊之助 言わへん、言わへん。あては正直やさかい、つい思
もてることが口に出るのや。

おきわ ほらまた。

伊之助 思もてる位かめへんやろ。あてかて人間やもん。

(箸を動かす)

おきわ わてはひつこいのン大嫌いやねン。

伊之助 そない言うけどな。あんたかて、ひつこいのンをよ
ろこんで呉れた時もあったんや。

おきわ そら、一緒になつた当座のことや。いまではもう、
あんたにからだを触られるだけで、ぞうとするのや。

伊之助 つまり、わてが嫌いになつたちゅうことや。

おきお ハッキリ言うたらそうや。……どうや。思い切つて

別れへんか。

伊之助 (答えず。悲しげに) ……おきわ。

おきわ なんや、けつたい怪体な声出して。

伊之助 あんたそれ、本気で言うてるのンか。……もしそや

ったら、……あては、……あては、底なし沼に身を投

げて死んでしまう。(涙を啜る)

おきわ それがええ。後生は法印さんに、叩うてもろたるさ

かい。

伊之助 (キツとなる) そんなこと聞いたら死ねん。まるで

あんたを法印さんにやるようなもんや。

おきわ そらどういことや。

伊之助 その位のこと知らないでかいな。ほほ。

おきわ あんた怪体なわらい方するな。

伊之助 そやかて…。

おきわ なにがそやかてや。あては法印さんを尊敬してる。

そやさかいようお説教もききに行く。けど、それだけ

のことや。そのほかになんのうしろ暗いこともあれへ

ん。いやらしい邪推やみなしたら承知せん。(睨む)

伊之助 (気弱く) ……すんまへん。あての言いすぎやった。

この通りあやまる。そやよって、どうぞもう、別れる

ちゆうような悲しいことは言わんようにして。……あ

ては一生、あんたの、その綺麗なからだを抱いていて

たいのや。……けど、あんたがあてを棄てるようなこ

とがあつたら、あてかて、することはせんならん。
おきわ そらなんや。……どういうこつちや。

伊之助 まあええ。……あてにとつては、そのすべすべした
肉附きのええからだだが天下の宝や。もしあんたが死ぬ
ようなことがあつても、焼場へは持つて行かへん。毎
日家で抱いて寝てる。たとえ腐つてウジ虫がおいて
も……

おきわ やめてツ。心のわるい。

伊之助 すんまへん。そやさかい、どうぞいつまでもあてに
附合うてて。……なるべくひつこないようにするさか
い。……法印さんを尊敬しはつてもかまへん。……
明かしてお説教を聴きに行きはつてもかまへん。(ジ
リジリと膝をすすめる)……そのかわり、家にいる時
だけは、このまっ白い、餅のようなからだを……。

(切なげに抱きつく)

おきわ (肩を振る) はなしてツ。気色わるいさかい、はな
してツ。はなしていうたらツ。(振りはなす) ああ、
いやや、いやや。死んでしまいたいわ。(ヤケに銚子
をとり、湯呑茶碗にあけて、ぐつとのむ)

伊之助 入れて来う。(銚子を持つて立つ)

又市が出て来る。

伊之助 まだいたんか。早よ行きんかいな。

又市 へえ。

伊之助 薬はどないした。

又市 あこの棚へ置きました。

伊之助 それは恐わい薬やよつて、ちゃんとしといてや。

又市 へえ。……河豚とうどんか。

伊之助、台所へ入る。

又市、外へ出て行く。

おきわ、棚の上を凝っと視る。

風花がチラつく。

おきわ、迷いはらつて立上がる。

小震える足で、仕事場に入り、薬袋を手にする。

台所から伊之助の声がきこえる。

伊之助の声 待つててや。おいしい漬物もつかつてゐるさかい。

おきわ、ギョツと立ちすくむ。

もう一度迷つた末、意を決して、伊之助の腕に薬を振り込む。

ちようどその時、又市が引返して来る。

又市 ひどうなりそうや。

又市、おきわの手元をチラと見たが、別に気には止めず、台所に入る。

すぐ傘を手にして出て来る。外へ出て行く。

おきわ、石のように硬直、のこりの酒をぐつとのみ干す。

伊之助が銚子と漬物皿を手にして出て来る。

伊之助　じきつけまっせ。

おきわ　冷やでええ。かし。（銚子を奪って、茶碗につぐ。

コチコチと音がする）

伊之助　（爛をつけて元の座に戻る）今日は相当冷える。ど

んどん食べて温くなり。（自分の腕に汁をつぎ足し、

一口食べる。へんな顔をする）ちよつと味が変わった

な。……なんぞの味が出たんかな。（また一口たべる）

おきわ　……大丈夫かア。

伊之助　大丈夫や。煮つまって来たせえやろ。（両袖で鍋を

持って立つ）お汁、足して来る。

伊之助、台所へ行こうとして立ちすくむ。

おきわ　どないしたんや。

伊之助　うゝん。（苦痛に顔が歪む。——手にした土鍋を落

としその場に倒れる）……うゝん。……うゝん。

(凄い形相で苦しげに虚空を掴み、悶絶する)

おきわ、さすがに気味わるく、柱の方へ逃げる。

肩で呼吸をしながら、眼をつぶっている。

伊之助の呻き声。

風花がつよくなる。

その四

その日の夕ぐれ。

前の場とおなじ。

伊之助の亡骸の前で、重善が経を上げている。

近所の男女が少しばかり坐っている。

又市と甚平が客のもてなしをしている。

又市は時々涙を拭いている。

おきわは近所の女の弔問に泣きながら応対している。

近所の女　ほんまに、とんだことやったなア。さぞびっくり

したことやろ。

おきわ　生前はいろいろとお世話になりました。:(泣く)

近所の女　まあ、あんまり悲しんでからだをこわすといかん。

及ばずながら力になるさかい、気をしっかりと持つのや。

おきわ ……わてもう、どないしてええかわかりまへん。

(身も世もなく泣く)

読経が終る。

又市が重善に茶を持って行く。

近所の男 おきわはん、お経がすんださかい、お住持さんに御挨拶をし。

おきわ、重善のそばへ来る。

おきわ お住持さん、おおきに有難うさんで……。 (泣く)

重善 泣きやみなされ。泣くと仏が成仏せぬ。……だけど、

河豚という奴は恐わいのう。

おきわ わてに食べさせよ思もて買うて来て呉れましたのやが、自分の方が先にあたってしもて……。

重善 そなたは食べなかつたのか。

おきわ へえ、お毒見や言うて、一ト口食べはつたとたんに、うーんとお腹抱えて死んでしまいはりました。

重善 恐わいのう。

近所の女 けど、あんたが助かったのが、せめてもの仕合わ

せというものや。

おきわ いいえ、わても食べて一緒に死にとおました。(烈しく泣く)

近所の男 気が強うても、やっぱり女子やなア。

近所の女 泣いたかて、伊之はんが生き返るわけやない。もうあきらめ。

重 善 そうじゃ。あきらめにくいところじゃが、仏のためにあきらめるのじゃな。

おきわ そないおっしゃいまして、……明日からわて一人で、どないして暮らして行きますのや。(泣き声を上げる)

重 善 いかさま、お仲の良い夫婦であっただけに、その悲しみはもつともじゃ。お察し申すぞ。

近所の男 そんなら、わてらは、これで。

近所の女 いずれまた葬い日に。

おきわ ……どうもすんまへんでした。

近所の女 なんぞ要るもんあつたら、言うといで。

おきわ おおきに。

近所の男女、帰ってゆく。

おきわ、悲しみを粧うて、線香を足しなどする。

又市と甚平、茶碗などを片附けて、台所に去る。

重善とおきわ二人切りとなる。

鐘の音。

重 善 ……ほんとに河豚の毒か。

おきわ あんたもそない思もたか。 ……そんなら大丈夫や。

重 董 ……と？

おきわ 察しがわるいなア。 ……殺したんやがな。

重 善 えっ。

おきわ 手拭の染め薬で。

重 善 (呼吸をのむ)

おきわ あんたのお言附け通りにな。

重 善 なんだと。

おきわ 言うたやないか、よんべ。

重 善 あれは酒の上だ。

おきわ なんであろうと、言うたことは言うたんやさかい。

そそのかしの罪は免れんわ。

重 善 ……思い切ったことをやる奴だ。

おきわ 女子の一念はこんなもんや。ほほ。

重 善 (呼吸を吐く)

おきわ 法印さん、これでわてらは一生はなれられんように

なつたんや。 ……間男した上に亭主殺しのそそのかし。

……もしわてを棄てたら、一緒に仕置場へ連れて行く

さかい。そう思もてや。ほほ。

重 善 (言葉が出ない)

鐘の音。

日が暮れかかる。

又市が出て来る。

又市 (泣きはらした眼で) おかみさん、持つて行くのや

つたら、暗ならんうちに、出かけまひよか。

おきわ そうやな。……法印さん、河豚の毒は腐りが早いそうなよつて、今夜の内に焼場へ持つて行たらどうでっしゃろ。

重善 そうじゃな。その方がさつぱりとして、あきらめやすいかも知れぬ。……よいじやろう。

又市 棺桶買うて来まひよ。

甚平 経帷子も一緒に。

又市 (おきわに) 寒い時やよつて、此のままでもよろしやろ。

おきわ そやな。お住持さんもおねがい申します。

重善 (迷惑気に) ……わしか。

おきわ 御縁の深い仏だつさかい。焼場でもう一ぺん押んでやつとくりやす。…なあ、そうしてやつとくくなはれな。重善 (やむなく) ……では、そうしよう。

鐘の音。

その五

その日の真夜中。

寂しい土手の道。

鷺の声。

長良へ帰る遊び人が、鼻唄をうたいながら、通って行く。

あとはまた森閑となる。

おきわと重善が長良の焼場から帰って来る。

おきわ 暗い晩やな。曇でも落ちて来そうだな。

重善 どうして提灯を持って来なかつたんだ。

おきわ 取乱してたんや。こう見えても女子やさかいな。

重善 たいへんな女だ。

おきわ あっ。(よろめく)

重善 気をつけな。

おきわ 水溜りが凍えとるのや。……手エひいて。

重善 なんだ、小娘みてえに。

おきわ 小娘やがな。あんたの前では、いつかつて。

重善 恐わい小娘だ。

おきわ けど、邪魔が入らいでよかつたなア。焼いてしもたら、もうこっちゃんのもんや。

重 善 いま頃は玉蜀黍みてえに、いい匂いで焼けていやがることだろう。……人間って、たよりねえもんだなア。

おきわ あんたも、浮気したら、あんなめに会うのや。

重 善 その時はおめえも一緒だ。

おきわ うれしいなア。いつ死んでもかめへん。

重 善 へ、うめえことを言やがって。

おきわ ほんまやがな。わてはほんまにそない思もてるで。

それにあんな牛娘にからだをねずらしたりして。

重 善 まだ言ってるのか。

おきわ 口惜しいさかい、何遍でも言うねン。早よ何処ぞイ連れて行かな、危のうて叶わん。……初七日までに行先き決めてしまお。

重 善 思い切って江戸へ行かねえか。

おきわ いやや、女子のいるところは。二人だけで暮らせると

こやないと。

重 善 ちえツ。やきもちやきめ。

おきわ そんな女子に誰がしたんや。

重 善 あっ。(足をすべらす)

おきわ それみ。あんたかてや。ほほほ。

重 善 おい、焼場の帰り途だ。あんまり大きな声でわらうな。

おきわ 真夜中の長良堤に誰があるいてるもんか。……わて、うれしいてしよがないのや。今夜からもうあの蛇にくらいつかれえでもすむと思うと。

重 善 そうでもあるめえ。さぞお寂しゅうござんしよう。

おきわ なんやて。憎たらしい。(つねる)

重 善 痛えッ。

おきわ ええ気味や。ほほほ。……今夜はわてが蛇になつたげる。

風の音。

重 善 うう寒い。早く寺へ帰って一杯やろう。

二人、ふざけながら去る。

風の音——遠く。

二人の跡から、少しおくれて、とぼとぼとあるいて来る男がある。

伊之助である。

その六

翌る朝。

空心堂の庵室。

おきわが重善に寄り添ったままで、眠っている。

雀の声。

甚平が帰って来る。

甚平 唯今。……おかみさん、こつちゃへお泊まりでしたんか。

おきわ (眼を醒ます) なんや、夜が明けてるのンか。

甚平 蒲団もなしで、寒いことおまへなんだか。

おきわ なんや、おっさんかいな。酔うて寝てしもたもんや

さかい。(さすがにちよつと気まりがわるく、重善を

はなれて寝乱れた帯を直す)

甚平 あのう、お骨は又やんがお家へ持つて帰りました。

おきわ そうか。おおきに御苦労はん。……おっさん、法印

さんになんぞ着せといたげ。風邪ひかはるといかんよ
つて。

甚平 へえ。

又市がへんな顔で来る。

又市 うちのおかみさん来てはれへんか。

甚平 此処に居はる。

又市 あ、おかみさん、旦那はんがおきわを呼んで来い言いはりましたんで。

おきわ 旦那はんで誰のことや。

又市 うちの旦那はんだす。

おきわ おまい、夜通し起きてて、頭どないぞしたんどちがうか。

又市 自分でもそんな気がしますねん。……妙な具合や。

甚平 どないぞしたんか。

又市 いまおっさんと其処でわかれて、お骨を持って帰ったやろ。ほしたら、旦那はんが先に帰ってはるのや。

おきわ えっ。

甚平 阿呆なこと言いな。お骨になった仏はんが、帰ってはるやて。(わらおうとする)

又市 いや、ほんまに帰ってはるのや。……御苦労はん、寒ぶかったやろと言いはった声も、生きてはった時のままやねん。

おきわ (寒くなつて来る)

甚平 足あったか。

又市 さあ、坐ってはったよつてに……。

甚平 そらおまい、幽霊ゆうれンやで。なんぞ心が残って戻って来はったんや。きつとそうや。

又市 いや、幽霊ンやない。どうも本物らしいわ。

甚平 そやかて、よんべ長良で焼いて来た人が……。

又市 そうやねン。其処がどうも納得がいかんねン。

おきわ (重善を揺り起こす) ちよつと、あんた、いや、法印さん、ちよつと起きとくなはれ。

甚平 ややこしい話になってますのや。ちよつと起きとくりやす。

重善 (眼をあける) どうした、皆集まって。

おきわ 法印さん、ハッキリ眼エ醒ましとくりやす。……う

ちの人が、家に戻ってますねんと。

重善 ふうむ。執念深い幽霊だの。

又市 幽霊やおまへんねン。たしかに本物だすねン。……

お膳の上にお椀やお茶碗並べて、……又市、朝御ぜん出けたさかい、おきわを呼んで来たって……

おきわ ああ。(おびえる)

又市 その声も、顔も、そっくり本物だすのや。

重善 だってお前、ゆうべ一ト晩中焼場にいたんだらう。

又市 へえ。

重善 ジリジリと焼けてるのを見て居たんだらう。

又市 へえ。

重善 それがどうして戻って来るんだ。

又市 そやさかい頭が妙になってますのやが。

重善 ……ふうむ、……生きてる時も変わっていたが、死んでからも手を焼かせる男だな。

おきわ わてもう家へ帰らへん。ずっと此処に置いてもらう。

戸外で伊之助の音がする。

伊之助の声 おきわ。……おきわ。

又市 旦那はんや。

皆、思わず硬直する。

伊之助の声 (近附く) おきわ。……おきわが寄せてもろて

まへんか。

皆、呼吸をのむ。

重善 (甚平に) 行って見な。

甚平 いや、わては…… (尻込みする)

伊之助の声 (近附く) おきわ。……おきわは何処にいます。

皆、小震える。

伊之助が常と変わらぬにこやかな表情で庭へ入って

来る。

伊之助 なんや。こんな所に居たんかいな。……あ、法印さんも、おっさんも。……お早うさんです。よんべはいろいろとお世話になりました。

皆、声が出ない。

重善、頭から蒲団を被る。

伊之助 おきわ。……朝御ぜん出けたよつて、戻つといで。

……早よ。……早よおいで。(手招きする)

おきわ へ。……へ。(失神しそうになりながら、惹かれて

行く)

伊之助 又やんもおいで。

又市 へえッ。

又市、夢遊病者のような足取りで、ふらふらとついでゆく。

重善と甚平のこる。

重善、恐怖におののく足で須弥壇に近づき、憑かれたように木魚を叩く。

甚平、震えながら合掌する。

その七

その日の午後。

伊之助の住居。

冬晴れの空の下で、伊之助がいつものように洗濯物を干している。

近所の者が聞き伝えて、伊之助を覗きに來て居る。恐わいので家には近寄らず、垣根の外から遠巻きに見ている。

伊之助

(気がつき、ニヤリとする) ええお天気で。

近所の者、キヤツと叫んで逃げ去る。

伊之助、べつに愕きもせず、干し物を終り、縁側へ來る。

伊之助

ああくたびれた。お茶まだか。

おきわが茶を入れて來る。態度が柔らかくなっている。

茶碗を伊之助の前に置き、恐わそうに退がる。

伊之助 (平然と茶をのむ) ……ああおいしい。 ……日の暮

れまでに、手拭届けに行て来るわ。

おきわ わてが行て来ます。

伊之助 いや、次の注文貰わんならんさかい、自分で行て来る。 ……帰りにまた、河豚買うて来う。

おきわ (恐わそうに凝視^{みつめ}ている)

伊之助 なに見てるのや。

おきわ いいえ。

伊之助 (茶をのむ)

おきわ ……なあ、あんた。

伊之助 なんや。

おきわ たのむさかい、言うとくなはれ。 ……あんたはいつたい、なんだんねン。

伊之助 可笑^たしなことを訊^たねる人やな。 あてはあんたの連合いやないか。

おきわ そんなことやおまへんねン。 ……あんたな、ほんまのあんただんのンか。 ……それとも、 ……ゆ、幽霊^ンのあんただんのンか。

伊之助 阿呆^なことを。 お茶がこぼれるがな。

おきわ なあ、頼^むさかい、ほんまのことを言う^とくなはれ。 ……あんた、昨日、死^ンなはったやろ。 ほして、長良

の焼場へ行きなはったやろ。……それが、それが、ど
ないして、家へ戻って来なはったんや。……生き返ん
なはったんか。それとも幽霊ンだっか。

伊之助 ……あんたの言うこと、もう一つようわからんが、
脳でもわるいのンとちがうか。そやったら、一ぺんお
祓い屋に来てもらわんと。ちよつと診たぎよ。(額に
手を当てようとする)

おきわ (恐わそうに尻込みする) いえ、結構だす。……あ
んたの正体さいわかったら直ぐ癒りますのや。

伊之助 正体。……化物やあるまいし。

おきわ 化物ンやおまへんのン。ほんまに化物ンやおまへん
のン。

伊之助 怒るで。……あては此の通り、正真正銘の手拭屋伊
之助や。嘘やと思もたら、此の眼エ見てみ。(手を握
る)

おきわ きゃア。(声を上げて逃げようとする)

伊之助 (手をはなさず) なにが恐わいねン。なんで連合い
が恐わいのや。……それともあんたなんぞ後ろ暗いこ
とでもしてるのンか。(にじり寄る)

おきわ (押しつめられて) いいえ、そんなことはおまへん。
……そんなことは決しておまへんけど。(必死の勇を
ふるって) あんたは昨日たしかに死なはった。よんべ
たしかに骨になりはった。それがわてにはわからんの

や。……言うどくりやす。たのむさかい言うどくりやす。それがわからんと、……わては、氣違ひになつてしまします。

伊之助 よっしゃ。言うたる。あてはたしかに死んだ。たしかに焼かれた。けど、あてはどないしても家へ戻らないられなんだんや。……もう一ぺんあんと暮らしたかつたんや。……もう一ぺんこの、スベスベしたからだに抱きつきたかつたんや。(抱きつく)

おきわ きゃあツ。(恐怖の叫びを上げる)

伊之助 (はなさず) おきわ。あては一生あんだからはなれへんで。たとえ殺されても焼かれても、生き代り死に代り、あんだのとこへ戻つて来る。あんだを抱きに戻つて来る。……今夜も一ト晩中、あんだにきゅうとからみついて寝るのや。……蛇みたいに。(力を籠めて絡みつく)

おきわ きゃあツ。(失神してしまふ)

伊之助 ヘツヘツへ。(凝つと顔を見て、好もしげに頬ずりをする)……ほんなら、また今晚、ゆつくりと。

伊之助、おきわをそのままにして、風呂敷包みを肩に背負い、出てゆく。

近所の女が通りかかる。

近所の女 (習慣的に) 今日ほ。

伊之助 ええお日和だんな。

近所の女 (伊之助とわかる。——急に悪寒を感じ、悲鳴を

上げ、駈け去る)

又市と甚平が蔭から見ていた態で座敷へ駈け上がる。
そのあとから重善と福造がつづく。

又市 おかみさん。しっかりしなはれ。

甚平 おかみさん。……おかみさん。

おきわ (うす眼を開く)

甚平 水。……水。

又市 (手拭を浸しに行く)

福造 (伊之助の去った方を見送って) 何処から見ても本

物やな。

重善 まったく妙な話だ。

甚平 こんな怪体なこととはじめてだすわ。

又市 (手拭でおきわに水をふくませる) おかみさん。…

…おかみさん。

甚平 気をしっかりお持ちやす。

おきわ (気がつく) 法印さんツ。おねがいます。……あの

男の来んとこへ連れて行つとくりやす。

重善 いや、何処へ逃げたって、きつとついて来るだろう。

おきわ わ、わてもう、今夜一ト晩過ごしたら、……こ、殺
されてしまいま。(極度の恐怖におびえる)

福造 そうやな。なぶり殺しにしよるかもしれんな。

甚平 何遍もおんなしこと言うようやけど、まったく、狐
につままれたような話や。

福造 (又市に) おまい、たしかに死骸が焼けてるのン見
たんや。

又市 たしかに見た。……と思うのやけど。

福造 なんや、頼りのない。

又市 いや、こうなつて来ると、よんべのことが、みんな
夢みたいな気がして来よるのや。

甚平 ほんまに、そんな気がして来よるなア。

重善 (腕組みして考えていたが) よしッ。決まった。
皆 (視る)

重善 もう一度あいつを殺して見よう。

福造 なんやて。

重善 幽霊なら死なねえだろう。……それを試すのだ。
(眼で招く)

皆、額を集める。

その八

その日の宵過ぎ。

底なし沼のほitori。

福造と甚平が得物を手にして伊之助を待伏せている。

重善が出る。

重善　しっかりやれよ。もし失策しくじったら、おれがグアンと

やってやるから。

福造　大丈夫や。あんな奴の一人位。

甚平　けど、幽霊ンやったら、齒ごたえがないかも知れま
へんで。

重善　そうだな。その時は逃がしてやれ。幽霊とわかれば、
それでいいんだ。

福造　よっしゃ。(得物に唾壺つける)

甚平　この年齢になって、幽霊ン殺すのんはじめてや。

福造　しっ。

皆、ふくれる。

又市が来る。

甚平 (とび出す)

又市 待つて呉れ。

甚平 なんや、又市か。

又市 来よつたで。来よつたで。……あ、あの提灯がそう
や。

重善 よし、ぬかるな。

又市 一つ、わてにやらしてくれ。

福造 やめとき。わいがやつたる。

又市 いや、ようコキ使いよつた怨みをはらすんや。……
わて一人でやるさかい、誰も手伝いなや。

福造 そんならやつて見い。……なるべく崇りは来ん方が
ええ。

甚平 来た。

皆、かくれる。

鐘の音。

伊之助が鼻唄をうたいながら、提灯を下げて来かか
る。

又市、エイと提灯を叩き消す。

伊之助 誰や。……何者や。

又市 エイツ。(脳天を打ち下ろす)

一撃で、命中したらしく、伊之助、呻き声を上げて
倒れる。
皆出る。

又市 此奴めが。此奴めが。(滅多矢鱈に打ち下ろす)
伊之助 ……ひ、卑怯者ン……。(絶命する)

皆、伊之助の上に顔を集める。

又市 大丈夫や。よう死んどる。

重善 よくやった。褒めてやるぞ。

おきわ (現われる) やっぱり幽霊ンやなかつてんな。

福造 となると、此奴はなんやつてん……。

甚平 またわからんようになった。

重善 なんでもいい。早く何処かへ始末しなくては。……

そうだ。あの底なし沼へ、石をつけて沈めてしまえ。

そうしたら、二度と上がっては来るまい。

又市 よし。それもわてがやる。……皆、向こへ行て、う

どんでも食べて待ってとくなはれ。

重善 よし。じゃ、頼んだぞ。

皆去る。

又市、伊之助の体を重そうに引張ってゆく。

その九

少し経った時刻。

寺の塀に沿った道。

夜泣きうどんの屋台の前で、材木に腰を卸し、重善。

おきわ、福造、甚平等がうどんを啜って居る。

福造 寒ぶなつて来た。

甚平 雪かも知れん。

梟の声。

福造 けど、よかったなア、正体がわかつて。

重善 やっぱり幽霊じゃなかったんだ。

うどん屋 えっ、幽霊が出ましたんか。

おきわ 幽霊ンが死んだんや。ほほ。

うどん屋 へえ、怪体な話でんな。

甚平 怪体な話や。……よんべからこっち、なんやしらん。

頭がぼうとして、阿呆になったみたいや。

福造 ほんまや

皆 (わらう)

うどん屋 すんまへん。其処ら廻つて来とおますさかい……。

福造 ああ、銭か。よっしゃ。(銭をやる)

うどん屋 すんまへん。おおきにありがとうございます。……ほん

ならごゆっくり。(客を呼びながら去る)

重善 莫迦に遅いなあ。

おきわ どないしたんやろ。

福造 生き返ったんとちがうやろか。

おきわ そんな阿呆なことが……。

又市、帰つて来る。

おきわ どうやった。

又市 やりました。

重善 生き返らなかつたか。

又市 大丈夫です。沼の中へ沈めたさかい、もう二度と浮

かび上がりまへん。砂利ですり剥いて、物凄い顔して

沈んでいきましたわ。

甚平 うどん出けてるで。

又市 こらええ。(うまそうに食べ出す)

風の音。

銀杏の葉が又市の襟に入る。

又市 あっ。

福造 (ドキッとして) なんやッ。

又市 なんや、冷めたいもんが襟筋に……。

甚平 (とってやる) 銀杏の葉やないか。阿呆。

おきわ びっくりしたがな。

又市 すんまへん。

風の音。

伊之助があるいて来る。

屋台の前に立つ。

食欲をそそられて、自分でうどんをつくる。

誰も気がつかない。

重善 (箸を落とす)

伊之助 (新しいのを差出す)

重善 (気附かず) ありがとうよ。

風の音。

おきわ けど、大丈夫やろな、あの沼は。

又市 大丈夫だす。底なし沼言う位やよって、あこへはま
って、上がった例しはあらしまへん。

重善 おいおい、もうその話は止しにしろ。壁に耳ありだ。

……わしら自身がまずそれをわすれるようにしなくちゃいけねえ。……あいつはもう此の世に居ないのだ。

長良の焼場で灰になったのだ。

福造 そういうわけや。

甚平 法印さんはやっぱりええこと言わはる。

皆、うどんを啜る。

又市、薬味を貰いに立つ。

又市 薬味を……。(伊之助の顔と合い、全身が硬直する)

福造 どないしたんや。

又市 (足を震わせながら元の場へ戻る。だまって伊之助を指さす)

福造 怪体な奴やな。どないしたんや。(立って、伊之助を見る。足が動かなくなる)

甚平 (おなじように気がつき、震え出す)

重善 (空になって井を返そうとして、伊之助と顔を合わす。カタカタと震え出す)

伊之助 (重善の方へ) お替りは。

おきわ (振向き、キャツと声を上げる)

皆、同時に声を上げ、井をすてて夢中に逃げ散る。

又市だけ逃げず、井を手にして、恐怖の声を叫びつづける。

又市 出たあッ。……出たあッ。

伊之助 (材木の上上がり) ……又やん。……又やん。……

……もう誰も居えへん。……やめとき。

又市 はは。面白かったねえ。(江戸言葉でいう)

伊之助 まだ走つとうるわ。はは。

又市 可哀想に。……もう此の位で勘忍してやったらどうだ。

伊之助 いや。まだまだ苦しめたらな。……おまはんには、

間男された男の口惜しさがわからんのや。(芝居の見得をして見せる) ……此の恨み、はらさで、おくべきかア。

又市 よう、手拭屋ア。

二人 (たのしげにわらう)

その十

おなじ日の真夜中。

空心堂の庵室。

おきわが半狂乱の態で、重善に追っている。

おきわ (茶碗酒をぐつと干して) わてはもう一日も此処に
よう居ん。気が違いそうや。いま直ぐ何処ぞへ逃げよ。
……なあ、そうしよ。

重善 おれもなんだか気がへんだ。なにがなんだか、ちつ
ともわからねえ。

おきわ あいつはやっぱり幽霊ンやった。……ともかくも大
阪を立と。そやないと二人ともとり殺されてしまう。
早よ。

重善 路用はどうするんだ。

おきわ そんなこと言うてられるかいな。ともかくも命が大
事や。早よ支度し。

重善 けどな、おきわ、たとえ大阪を逃げ出しても、二人
が一緒に居る限り、あいつの幽霊はきつとついて来る
と思わなくちゃ。

おきわ ほんなら、別々に逃げよと言うのンか。

重善 別々に逃げたつておんなじだ。おめえとつながつて
いる内は。

おきわ ほんなら、ほんなら、切れた方がええとでも言うの
ンか。

重善 ……その方が互えの身のためだと思うんだ。

おきわ いやや。わてはそんなこといやや。たとえあいつに

とり殺されるにしても、あんたと二人で殺されたい。
わかれるやなんて、そんなことが出けるもんか。いよ
いよとなつたら、この薬で死の。

重善 なんだ、それは。

おきわ あいつを殺した染め薬や。

重善 (半ば独り言のように) そこまで思い詰めてるのか。

おきわ そんならわて、家へ行て、荷物拵えて来るさかいな。

あんた、此処にいとつてや。一人で行つたらいやや
で。

おきわ、そそくさと去ろうとする。

ふと前方をすかし見て、物蔭に身を隠す。

福造がおそめを連れて出る。

福造 いまの間や。蜷橋の下に伝馬舟てんまふねつないたるさかい、

早よおいで。

おそめ 法印さん、行きまひよ。まごまごしてたら殺されま

つせ。

福造 行先は十三じゅうその別荘や。わいも後から行くさかい。…

さあ、早う。

重善 おきわが怒ることだろうな。

福造 まだそんなことを。桑島の旦那はな、娘を可愛がつ
て下さるなら、お上には金を使て、一生罪をかくす

ことにすると言うてはるのや。あんな女子は放つてしまえ。

おそめ 法印さん、そうしとくりやす。おねがいます。……

なあ。(からだをくつつける)

重董 ……よし、そう決めた。

おそめ うれしいッ。

重善 おきわに見附かるといけないから、一ト足先に出てくれ。

福造 よし。直ぐ来いよ。

重善 着換えをして直ぐに追いかける。

おそめ 早よ来とくなはれや。舟にかくれてますよつてに。

おそめ、福造に連れられて出て行く。

重善、急いで次の間へ入る。

おきわが立聞きしていたところで出る。

素早く徳利に薬を入れる。

重善が荷物を背負って出て来る。

重善 (ビクツとして) は、早かったな。

おきわ 恐わうて、家に入れたんだ。このままで行こ。

重善 (困る) そ、そうするか。

おきわ 気つけにぐうつとやつて行こ。(徳利を見せる)

重善 (のみたくなる) そうだな。……よし、早く注げ。

おきわ このままのみいな。(徳利を渡す)

重善 そうだ。(徳利を口にし、ガブガブとのむ)

おきわ もつとのみ。

重善 (ほっと息をついて) おめえものめ。

おきわ (手にとつて) ……法印さん、……あんた、最後の

土壇場でわてをすてたな。

重善 な、なんのことだ。

おきわ ふふふ。気の毒やけど、もう牛娘と道行は出けへんで。

重善 え。

おきわ そのお酒に、なにを入れたか知ってるか。……これ

や。(染め葉の袋を出す)

重善 ええッ。(仰天する)

おきわ あんただけ死なさへん。わても一緒に死ぬ。(ゴク

ゴクとのむ)

重善 (大狼狽。口に指を入れてゲゲエと吐こうと努める)

おきわ (寄添う) 法印さん、あてをしつかり抱いて死んで。

重善 いやだよ。よくも卑怯な真似をしやがった。……も

う情婦いづちでもねえ、女房にやうでもねえ。

おきわ そんなに怒らんと。もう死ぬのやないか。……やさ

しゅう、抱いとくれ。(抱きつく)

重善 はなせ。はなしやがれ。……言っというてやるがな、

……おれはおめえに惚れてたんじゃねえ。間男の味に惚れてたんだ。とんでもねえあまだ。毒なんか飲ませやがって。

おきわ なんでもかめへん。あてはあんたと心中が出て、こんなうれいことはあれへん。

重善 おれはいやだ。誰がおめえみてえな奴と一緒に……畜生め。……よくもよくもおれを道連れにさせやがったな。(叫びつづけながら、ふと気がつく) ……毒は廻らねえじゃねえか。……ちつとも廻って来ねえじゃねえか。

おきわ ほんまや。どないしたンやろ。あの人は直ぐ死んだのに。……もうちよつと待って見よ。

重善 莫迦野郎ッ。毒の廻るのを待って居られるけえ。……はなせ。……はなせ。……おれは行けるとこまで行く。

おきわ 待って。……そんならわても。(縋る)

重善 はなせ。はなせつたらッ。

重善、振りはらつてとび出す。

須弥壇の前の鉦が叩かれる。

伊之助が幽霊の姿で立っている。

同時に庭に火の玉がとぶ。

重善、恐怖の声を上げ、荷物を背負ったまま、足も

宙に庭の外へ逃げ去る。

おきわは半ば失神した身体をよこたえたまま、あえいでいる。

伊之助 ……おきわア。(迫る)

おきわ あんた、わるかった。 ……わてがわるかった。 ……

かんにんして。(腰をぬかしたまま叫ぶ)

伊之助 おきわ。 ……もう一ぺんそのからだを。(抱きつく)

おきわ (断末魔の声を上げ、ついに失神する)

又市が黒衣に芝居用の焼酎火を持って出る。

又市 伊之さアん。

伊之助 うわッ。(おどろく) ……阿呆ッ。

又市 はは。だけど、あの染め薬を本物と考えたところなんか、しつかり者に見えても、やつぱり女子だね。

伊之助 ちよつとくすりが利きすぎた。

二人 (わらう)

伊之助 (おきわを視る) 大丈夫やろな。 ……死んだンやないやろな。

又市 大丈夫だろ。(懐ろに手を入れ、出してはまた入れる)

伊之助 なにしてるのやッ。(突き倒し、自分で手を入れる)

その十一

三カ月ばかり経った頃。

伊之助の住居。

桃が咲いている。

菜の花も咲いている。

伊之助は針仕事に余念がない。

座敷の前には、地面に莫塵を敷いて、気が狂ったお

きわが坐っている。

三味線をひきながら、鼻唄をうたっている。

鶯の声。

垣の外を近所の男女が通る。

そつとおきわの姿を覗き込み、嘲りの微笑を交わし

合って去る。

おきわ、鼻唄をつづける。

伊之助（縫物を終って）さあさあ、御ぜんにしまつせ。お

腹が減ったやろ。（針箱を片寄せながら）……ええ時

候になったなア。まるで生き返ったようや。

おきわ（無心にうたっている）

伊之助、台所に入り、直ぐ膳を持って来る。

伊之助 さあ、おそなった。かんにんやで。……さつき貫ろ
た赤飯や。お昼飯はこれですましとこ。晩は水菜と鯨いり
皮がらでも煮て。……こっちやへお上がり。……ああ、裸
足のまま上がったり下りたりして。……まあええ。

伊之助はおきわの手をとって、座敷に上げ、自分の
そばに坐らせる。

うれしそうに赤飯を食べさせてやる。

伊之助 へ、お上がり。……ああんとかあけて。(舌にのせ
てやる) へ。

おきわ (無心で食べる)

鶯の声。

又市がキッチンとした羽織姿で来る。

又市 今日は。

伊之助 よう、今日は。……まあ上がり。

又市 相変わらず食べさせてもらってますな。

伊之助 なに言うてもわからへん。……朝から晩まで、一生
懸命三味線ひいたり、花札遊はちしたりや。

又市 重善と一しよにいるつもりなんだろうか。

伊之助 もうそれ言いな。わすれよ思もてる時に。

又市 すまねえ。

伊之助 けど、話の出たついでや。……その後あいつのたよ

り聞かんか。

又市 十三の方の別荘にいますとか聞いたね。

伊之助 なんや、そんな近いとこにいよるのんか。

又市 病らっているという話だ。

伊之助 牛娘にねずられ過ぎよつたんやろ。

又市 あんたも気をつけとくれよ。

伊之助 御深切に。

二人 (仲良くわらう)

鶯の声。

伊之助 (おきわに) もっと食べや。……ああん。……おい

しいやろ。

おきわ (無心で食べる)

又市 おいしいですか。

伊之助 言うたかて、わかれへんちゆうたら。

又市 (ホロリとなつて) ……けど、まさかこうまでなる

とは思わなかったなア。

伊之助 あの晩家へつれて帰って、やっと正気に返ったと思

もたら、なんやしらん、わけのわからんことを口走りはじめよったんや。けど、気が違ごたお蔭で、間男の罪にもならず、こないにたのしゅう生きてられるのや。又市 あんまりたのしそんでもなさそうだな。

伊之助 ……おまい、わいに逆らいに来たんか。……わいはいま、ほんまにたのしいねン。気違いは間男をせえへんしな。……一ト晩中抱きついてても、前みたいに文句言いよれへんし。ほんまにええ人形が出けたと思もてるのや。……みんなおまはんの狂言立てのお蔭や。そのうち河豚でも奢ろう。

又市 いや。河豚はもうけっこうだよ。

伊之助 はは。……けどな、あの時、河豚にあたつたように見せかけて、……こうして、虚空を掴んで、うゝんと悶絶した時のしぐさは、おまはんに見せたかったで。

又市 元が役者だから、お手の物ンだろう。

伊之助 座頭はんの蝮の市兵衛どころやなかつたな。

おきわはまた地面に下り、花札を弄りはじめている。

又市 そうだ。座頭さんから話があつてね、もう一ぺん作者部屋に帰らんかって……。

伊之助 御勘当はゆりたんか。

又市 お蔭さまで……昔朋輩の家へ職人に住み込んでま

で人間を建て直そうとした、その心がけが殊勝だと言
つて。

伊之助 恐わい建て直しや。

二人 (わらう)

又市 それではまたやって来る。

伊之助 何処ぞい行くのンか。

又市 ちよつと網島まで法事に。……あ、そうだ。……あ

の時焼場であんたの入つてた棺桶とすりかえた棺桶、

あの仏の今日が百カ日になるんで。

伊之助 ふうむ。ほなら、わいもほんま言ううと百カ日やねン
な。

又市 そういうわけだ。はは。

伊之助 法事やみな急がへん。曾根崎へ行て、わいの精進落
としをやろう。……おいで。

又市 それは御丁寧なことで。

二人 (わらう)

伊之助、羽織を着る。

又市、凝つとおきわを視る。

おきわ、無心に花札を並べている。

伊之助 どないしたんや。

又市 あの勝気なおきわはんが、こんなに他愛なくなつて

しまつて。……ほんとにわるいことをしてしまつたねえ。(眼頭を拭く)

伊之助 ほんま言ううと、わいもちよつと仕返しすぎたと思もてるのや。

又市 わるい大詰だつたな。……おきわさん、ゆるして下さい。(手について詫げる)

伊之助 わいもついでにあやまつとこ。(頭を下げる)
おきわ (無心に花をひく)

鶯の声。

二人、歩き出す。

伊之助 ええ日和やなあ。ちようど今のわいの心みたいや。

……家を空けても、もう間男の心配はないし、安心して遊びに行ける。……けどな、ホツとしたと一緒に、ちよつともの足らん気もするねン。なんぞ又事件が起きるとええな。

又市 いや、かんべんして貰おう。もうこんな助太刀はコ

リコリだよ。

二人 (わらう)

二人、去る。

おきわ、無心に花をひいている。

間。

甚平が垣の外へ来る。

おきわ一人と見て、そつと入って来る。

甚平 おきわはん。……おきわはん。

おきわ (顔を上げる。あたりを窺ってから) ……大丈夫か。

甚平 誰もいえしまへん。(あたりを見ながら耳元へささ

やく) ……行つて来ました。

おきわ ……どないやった。

甚平 やつぱり法印さんは、あんたがお好きらしおます。

おきわ (あたりを見て) あてのこと、おぼえててくれはつ

たか。

甚平 それどころか、法印さんの方から、一ぺん会いたい

言い出さりました。

おきわ ほんまに。(よろこぶ)

甚平 へえ。……牛娘はんにすっかり飽きが来てるのやけ

ど、世間の噂がしずまるまで、かくれているのや言う
てはりました。

おきわ おっさん、……すまんけど、も一ぺん行って来て。…

明日の晩はうちの阿呆が大和へ仕入れに行て留守やさ

かい、相談にやって来てくれやすちゆうて。

甚平 そんなことしはって、よろしいのンか。

おきわ 気違いはなにをやってても罪にはならへん。ほほ。…

…燃りが戻ったら、きつと御礼はするで。

甚平 へえ、おおきに。会いはるのは、お寺の庵室がよろしい。わて一人やさかい。……昔を思い出しはって。

おきわ いやなおっさん。

甚平 へへ。……ほんなら行て来ます。ほかになんぞ言うことはおまへんか。

おきわ そやなあ。きつと来てくれはらんと、ほんまの気違いになりまつせ言うといて。

甚平 ほんまの気違いにな。へへ。……ほなら、行て来ます。

甚平去る。

春風に花びらが吹かれて来る。

鶯の声。

おきわ、重善との逢瀬をたのしんでニヤリとする。
人が垣の外を通る。

おきわ、また狂人を装い、余念なく三味線をひき、
鼻唄をうたう。

花びらがまた風に吹かれて来る。

幕